



社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 福田ビル 301
〒169-0051 TEL: 03-3204-0595 (FAX 兼用)
E-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp URL: http://nitteikyoku.org/
編集者: 広報委員長・柴田 正文
委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題 字: 故・上原 敬二
発行日: 平成 25 年 11 月 30 日



日比谷図書文化館でのパネルディスカッション「これからの庭を楽しむ」の討論風景（撮影：木下 和成）

今、自分ができること、庭の本質とは何なのか、自分の表現したい日本庭園とは何なのか自分で答えを出さなければならぬのです。いかなる場にも対応できる感性を磨き感覚を習得することが大切です。自分が美しいと思うものに巡り合うための美術探求に励むと同時に、他の分野で活躍する人々の活きた話を聴くことが大切と考えています。

（理事 東京都支部長）

感性を磨き感覚を習得する

上野 周三

創立95周年の本年、各支部も活発に活動している中、東京都支部としても、4月に京都造形芸術大学教授 尼崎博正先生による「日本庭園と石造美術品」と題した講演、石工芸の第一人者である京都北白川の石大工 西村金造氏と尼崎博正先生との対談「石工の技―創造する伝統」、10月には本部との共催で庭園業界を超えて意見交換をし、新たな庭の可能性を追求するためのパネルディスカッション「これからの庭を楽しむ」を開催いたしました。パネルディスカッションでは、実業家 高水謙二氏、建築家 中山章氏、環境デザイナー 正木覚氏、ランドスケープアーキテクト チャー 榊原八朗氏、作家 金網重治氏をパネラーに迎え、コーディネーターを雑誌「庭」前編集長、豊蔵均氏にお願いして活発な意見交換を行いました。100名を超える参加者があり、あつという間に時間が過ぎてしまいましたが、各々思考の幅が広がり今後の考え方の参考になったのではないのでしょうか。

先日調べ物をするために読んでいた本の中で、日本画家の横山大観の言葉が目にとまりました。「芸術には眼で描く芸術と心で描く芸術と二つある。眼で描く芸術は技術が主になりたがり、心で描く芸術は技術を従とする傾きがあります。当然前者は眼で観る外なく、後者は心で読むと云う事になります」（大観芸談）、「作家はどこまでも創造して行くことが貴いので人の真似はいけません。自分の今日の作品と明日のそれとは変っているといのです。またその変化のない人は駄目です。ただ一つ我は日本人であるという誇りをどこまでも堅持してもらいたい」（大観画談）。この文章を初めて読んだのは京都での修行から帰ってきて5年後の頃で日本庭園協会の伝統庭園技藝を受講したいと考えていた時でした。ただ、いい庭を造りたい。しかし、いい庭とは何なのかと判からず現状のままではいけないのだと思っていました。

ので他の行事と重ならないように月一回程度のペースで研修会を進めています。

主任講師は君和田健二さんと、若い頃京都で研鑽を積み、持った生まれた好奇心に導かれ、独立後も独自の発想と鋭い観察眼でご自分の世界観を描き続けておられます。

千葉県支部では今後もこの技藝を広くとらえ、この地だけの物とせず、言わば相撲の出稽古のように違った地域に向き多くの支部との交流を通し、各地の技術を教えていただく場と考えています。



技藝会場の一コマ

めて石川県支部長武部さんを初め支部の皆様方がとう御座いました。また今後は他支部に伺うだけで無く、他支部から講師を招いての講習会も出来たらと構想を練っております。他支部の皆様、千葉県支部からお願いした時は快いお返事をいただけるよう宜しくお願い申し上げます。

（理事 千葉県支部長）

（文責：岩崎隆 千葉県支部 正会員）

【若手レポート】

◎吉田稔：「石積みがしたい」この思いから参加させていただきました。石の加工は初めての経験で自分の道具作りから始めました。コヤスケ、ハンマーの柄の握え方から指導



台杉剪定を指導する君和田健二講師

していただきました。御影石を加工しながら積んでゆくのですが、思い通りには加工できず繰り返し道具の使い方を学びました。石の配置、隅石の積み方、セリ矢での石割りなど貴重な経験をさせていただき庭園技術の奥の世界を垣間見ました。

◎宮本佳明：いつも君和田さんには「大胆かつ繊細に」とご指導をいただいています。細かいところにまで気を使われ繊細な仕事の出来る器用な方です。君和田さんは「庭師にやっていけない事は無い」「庭師は何をやってもいい」と言われるように造園工事はもちろん、石屋さんや大工さん顔負けの仕事までこなします。そのお陰で私たちも勉強の幅を広げることが出来、庭師と言う



北山杉圃場での研修

仕事の深遠さを改めて感じる事が出来ました。

◎市川良平：君和田さんが管理されている北山杉圃場での講習会に参加しました。関東地方では台杉を使った庭は少なく、中々接する機会のない樹種で貴重な体験が出来ました。台杉仕立ての剪定、管理方法、北山杉の特性など自分の知識、意識に無かった細部に渡って勉強することが出来ました。今回の講習会で学んだ事を常に意識しながら、今後の仕事に大いに活かし実務経験を重ねることで確実に自分のものにして行く事が最も重要なことだと実感しました。最後に君和田さんをはじめ千葉県支部の皆様には若輩者の我々の為にいつもこのような場を設けていただき感謝申し上げます。

【あとがき】本年はご存知のように出雲大社と伊勢神宮の遷宮が重なった大変珍しい年です。20年毎の伊勢神宮の式年遷宮に際しては、建物は何論、装束、調度品の数々まで新しく調えられます。これは神道の「常若の思想」に基づいていると言われていますが伝統技術の伝承という重要な役割もあります。本協会の重要な事業である伝統庭園技藝が本年より仙台で「東日本大震災復興祈念庭園作庭」という旗印の下に始まりました。5年がかりで完成を目指します。会員の皆さん、仲間を誘って是非参加して下さい。

第5回 庭園技術連続基礎講座の報告

未来を見る

座間 友和

若葉のもえる5月、今年も庭園技術連続基礎講座が始まった。5回を数えるこの講座に私は第2回から参加しています。

講座では毎回多数の講師を招き、午前の「庭に向かう私の姿勢」では日本の庭園界を牽引する講師の方々が実践している事、人生で学んだ哲学的な話等。「先人の道」では今は亡き先輩方の作風や人柄等の話を聞ける非常に貴重な場でした。午後の庭園見学では作庭等に関わった方を講師とし、庭園を作庭側からの観点や見どころ、時には客観的な見方で解説していただき、より深く理解することが出来ました。

今回の会場も東京、神奈川、千葉と関東が中心で、毎回講習会場へは電車やバスを使つての移動となりましたが、普段は車での移動がほとんどで恥ずかしながら最近まで電車の乗り方もよく分からない私でしたが電車で移動にも随分と慣れ、改札口前の雑然とした人の渦にも臆することなく進んで行く事が出来るようになったのも参加して得た副産物でした。



護国寺庭園で説明する上野周三講師

講座では、写真や雑誌の記事の中でしか会うことの出来なかった講師の先生方と直接会話まで出来ることに身が震える思いでした。先生方の感性を肌で感じる事は何事にも代えがたい経験であり、自分の目指すべきものが心の中で大きく熱くなるのを感じました。今回の講師の一人、金網重治講師の「人はなぜ生きるのか、人はなぜ山に登るのか、そして人はなぜ庭を造るのでしょうか。この答えを探している。」この言葉を聞き私の心の奥にも似たものがあることを感じました。今はまだこの言葉は私にとって大きすぎて理解するための片鱗さえも見つかりません

が、この答えを探しながら、庭を通して一歩ずつ進んで行こうと強く心に刻みました。

横浜三溪園の庭園見学では、廣瀬慶寛講師の計らいにより普段は一般公開していない重要文化財で、紀州徳川家別荘を移築した臨春閣に特別に入らせていただき、望月敬生講師の繊細・精巧な数寄屋風書院造りの意匠の説明で江戸時代の大名の夢を垣間見たような気がしました。成田山公園の見学では、成田山新勝寺本堂にて一同御護摩祈禱を受け、未来への発展を願うとともに私の煩惱だらけの心が浄化されるよう願いました。

最終日に行われた懇親会はほとんどの受講生が参加しました。お酒の力を少し借り、顔を突き合わせ、お



葉山の茅山荘で金網重治講師の話に聞き入る

「繋ぐ」という事
― 技術を知恵を情熱を志を ―

木下 和成

まず始めに、今回の「第5回庭園技術連続基礎講座」にて貴重なお話や見学の場を与えて下さった講師の先生方、またそうした機会を作って

下さり、滞り無く運営された日本庭園協会スタッフの皆様に紙面を借り御礼申し上げます。

私達はとても大切なものを受け取ったに違いない。それは「言葉」を「繋ぐ」という事。

講師の先生方はご自身の経験を惜しげも無くお話しして下さいました。それは長年かけてご本人が積み重ねてきた貴重な財産である。それを得るには並大抵の努力ではなかったはずだ。先生方から出る「言葉」はどれも重みのあるものばかりだった。そのようなものをいただくからには、こちらもそれ相応の覚悟が無ければ失礼であろう。そのお話は庭に関しては勿論であるが、それよりも、人と人との繋がりという事が主になっていたように思う。

切り取った自然、手の内の自然、庭というものを端的に表すとそうい



成田山公園での中村寛講師の講義

う事であろうか。

だからこそ人の手がかかる。だからこそ私達の仕事が存在する。

日々刻々と移ろう庭。時間の中で、季節の中で、変わり続ける中の変わらない事。作庭者の手を離れ長い年月を経て、それでも輝きを放つとは一体どういう事なのであろうか。

そこには自然の持つ本来の美しさがある。ただ、それを支えているのは人である。先人から代々繋がれた「言葉」があり、そしてまた、それを大切に繋いで下さった講師の先生方の「言葉」が乗る。

私にはまだ「言葉」が足りない。「古いものを充分に咀嚼する。そこに軸足を置き、新しい事を考える」本講座第2回講師の金網重治先生のおっしゃっていた事である。

我々の「言葉」は技術であり知恵であり情熱であり志なのである。そして我々は先代から次代へとそれを「繋ぐ」担い手である。

講師の先生方と比べるなんてとてもおこがましい事であるが、壮観な庭を前に、そして先生方の重みのある「言葉」を前に、自分の未熟さを益々思い知った。と同時に、自分は何をすべきであろうか、そして何が出来たのかという事を考える良い機会となった。



昭和記念公園での集合写真

自分の中に積み重なっていくもの。身に起る全ての事に無駄なんてないのであろう。そうして自分の「言葉」が生まれていく。

今だから出来る事。今しか出来ない事。時代に沿う。時代に乗る。あえて時代に抗う。

私にはまだまだ「言葉」が足りない。希望を込めて。

第6回庭園技術連続基礎講座の開催を心待ちにしております。

(東京都支部 正会員子弟)



横浜三溪園での望月敬生講師の説明

互いの思いを語り合う姿に心を熱くしました。こういう経験がこれからを造る礎になるのかという思いになり、改めて会場を見回すと、将来の日本庭園界を牽引する方々が目の前にいるのではないかと、はっとする思いでした。肩を抱き合い意気投合して二次会会場のネオン街へと進む千鳥足。未来が楽しみです。

(神奈川県支部 正会員)

一般社団法人 移行申請認可報告

望月 敬生

(社) 日本庭園協会は、平成25年9月20日付で、一般社団法人への移行申請が認可されました。日本庭園協会が社団法人になったのは、昭和12年です。この度の新法人法は、従来からの財団法人や社団法人を見つめ直す必要から、平成21年に施行され、5年間の猶予を持って、平成25年11月30日までに移行申請するか、解散するかという状況に迫られました。今までの公益目的の事業を継続して移行申請するか、一度解散して新しく法人申請するかという判断も含まれます。この新法人移行の主な申請内容は、新法人法に基づく新定款の作成と、公益事業の内容の確認です。ただし新法人への移行ということは、旧法人における剰余財産を全て無くして出発するということが必要になります。そのためには従来からの活動を新法人において継続していく時に、その継続事業の経費の中で今までの財産を使い切るということであり、その完了までは内閣府に報告をする義務が生じます。一方、会計内容は形式化したものではなく、公益目的の事業のために、具体

的にどのように使われたか、そして予算をどのように取るのかを、明確にした会計内容が必要となります。

この度の移行申請において問題となったのは、新定款の内容、公益目的事業内容の明確化、その事業活動に適した明確で具体的な予算決算書、そして継続事業と剰余財産の整理でした。

旧法人は環境省の管轄で、まず定款改正のための旧定款の登記が必要でした。その登記後、内閣府に管轄が移り、公益事業の内容としては、鑑賞会活動、支部活動、国際活動、伝統技藝、若者の技術育成についての意義を理解してもらいました。そして、新たに文化財庭園の調査・修復を入れ込み、会費規程も改正しました。その活動の実績をもとに、平成24年度の決算、25年度の予算を整理し直し、平成26年度に繋げるような継続性のある内容にしました。各支部が活動しやすいように、本部と支部の関係を明確にして、鑑賞会はその歴史を踏まえた上での活動意義を理解してもらいました。そして新法人移行後の鑑賞会のより積極的な活動、庭園協会として直接的な国際活動、若者の技術者育成については、より公益性を高めるように指導を受け、日本庭園の維持・管理技術が世

界においても求められていることを理解してもらいました。

このような段階を踏んで認可を受け、これからの予定としては、内閣府の指導のもとで12月19日に申請書類を提出、平成26年1月6日に登記をして、「一般社団法人日本庭園協会」に移行することになります。

(常務理事 総務委員長)

ポートランド日本庭園創立 50周年記念式典に参加して

三橋 一夫

10月19日にポートランドの日本庭園50周年記念式典が開かれ、日本庭園協会の一員として招待を受けたので出席してきました。

既に日本では5月に椿山荘で、三笠宮彬子殿下をはじめ、ユニクロの柳井夫妻、根津美術館根津ご夫妻、建築家隈研吾氏、由紀さおりさんら、アメリカから日本庭園の理事や役員の皆さん、我々日本の関係者が大勢集まり、お祝いのパーティーをしました。

10月18日には、理事の皆さんが開いて下さるランチやディナーパーティーが前夜祭さながら高台の素晴らしいお屋敷を開放して催されました。これらは日本庭園をサポートす

る理事であるこの家のご婦人の厚意によるものでした。ポートランドの日本庭園は1967年に戸野琢磨先生の設計により開園し、代々小形研三先生の門下、6人の日本人ディレクター達が従業員技術指導や庭園の拡張仕事を進めてきたという経緯があります。又、当協会が1996年に第1回の国際シンポジウムを開催した場所として忘れ難い存在でもあります。その時にワークシヨップの一環として作った水琴窟や竹垣は今でも立派に残っています。その美しさと管理運営の優れている点で、全米一と言われており、我々も何度か指導や講演に訪ねている親しみ深い庭園です。

19日の式典は市内の美術館に於いて夕刻開かれ、参加者は520人と盛大なものでした。来賓はワシントンより佐々江全権大使、ポートランドの古沢総領事をはじめ日本庭園の理



当地に縁のある由紀さおりさんも招かれた盛大なパーティー

事や関係者、日本からの参加者が和気あいあいと歓談する中、これ迄庭園の発展に貢献してきたディレクター達へのスタンディングオベーションは感謝と敬意のこもったものでした。今後は拡張計画が進む予定で、更に大きく発展していくことと思います。

新しく結成された北米日本庭園協会に当協会も加入しましたが、その中心となる事務局がこのポートランドの日本庭園です。日本庭園を媒体としての日本文化の発信や庭園技術や研究の更なる追求、発展の場とし、これから一層協力しあって、新しい展開をこの50年を節目として、互いに研鑽し合っていきたいと願っています。

最後にこの式典の参加者に対し関係者の方々の細かい心遣い、もてなしの気配りに敬意をもって感謝を申し上げます。

(理事 国際活動委員長)



中央の三橋理事の右は佐々江全権大使、左は古沢総領事

平成25年度 支部活動報告

香川県支部／新潟県支部

香川県支部・本部共催講座

平成25年6月8日～9日

四国での共催講座報告 水本 隆信

平成25年6月8日～9日の2日間、香川県・愛媛県において、研修会を開催しました。今回は本部より、廣瀬慶寛常務理事・香川県支部会員の越智将人氏を講師に迎え、それぞれの庭に対する思い、作庭論を語っていただきました。

ご承知の通り、二人とも日本庭園協会賞を受賞され、作品についても雑誌『庭』にも度々紹介されており、多くの造園人からも高い評価を受けています。案内のGSJミニニュースの発行後間もなく定員いっぱいとなり、当初の予定より増員しての開催となりました。

越智氏の講演は、「技＋感性＝技量」のテーマで自作品を紹介しながら作庭論を語っていただきました。私たちは工作上、建築家とのかかわりが多く、現場でもよく議論するこ



瀬戸大橋記念公園にて

とがありますが、越智氏は「同じ土俵に上がることが大事で、対等の立場にならないと仕事はできない。そのためには造園から建築に対して、様々なことを提案し、また、庭づくりの基本として、時間を忘れさせる心地よい空間を作ることを心がけている」ということです。そのためには、必要以上の技を見せるのではな



萩の茶屋の外観

く、感性を加え、枠にとらわれないことが大切で、素材に少し手を加えることで、さらにいいものができると、数多くの作庭の経験から教えられる講演でした。

続いて、廣瀬講師からは「攻めの庭・守りの庭」のテーマで講演をいただきました。廣瀬氏は雑木の庭の先駆者である飯田十基氏の門下生であり、雑木の庭を多く手掛けてきました。一方で文化財庭園保存技術者協議会の代表として、東京・鎌倉をはじめ、全国各地の文化財庭園の修復を指導し「守りの庭」をしながら、日本庭園の発展と啓蒙に尽力されています。普段私たちは古庭園の話に触れることが少ないの



客席から滝流れを見る

石組の庭でした。

次は、新居浜市にある「萩の茶屋」の庭、雑誌『庭』にも紹介されていて、見覚えのある方も多く、特に版築塀の色合いと雑木の組み合わせ、滝流れの妙について参加者から感動の言葉が多く聞かれました。完成された域の庭でした。

続いて自宅の庭について、越智氏は自ら建築、左官に提案し、庭の側から住みやすい建物になっているか追求した実験的な空間を創ってみたとの説明で、庭と建物の無限の広がりを感じました。また、植栽においても森を感じられるよう特に下草のしつらえに気を配るなど、自然をよ



愛媛の越智氏自邸



せせらぎが優しい矢野邸庭園

く見ることの大切さを教えられました。

最後に、今治市の矢野邸の庭は完成して半年ほどですが、すでに何年も経っているように自然に馴染んでいました。また、変形的な土地と足場の悪い条件での版築塀、前庭から主庭へのアプローチ変化も違和感なく受け入れられる庭でした。

今回の研修会は参加者にとって大いに刺激になっただろうと思います。地元以外に関東・中国地方から多くの参加をいただき、ありがとうございました。

（評議員 香川県支部長）

準備と反省の大切さを再認識

藤原 忍

広島県支部、岡山県支部に続いて中国地方第三回目の共催講座でしたが、いずれの講座でも得たものは数多く、今の私の身の中に入っています。

最初の福山・鞆の浦では、自然の景色、特に島と海の景色に先人たちは感動し着想を得て、庭に表現していたのではないでしょう。

次の岡山県での講座では、個人庭園から先人の作庭家の作品が紹介され、そういう庭を大事に残して行く為には、どう接して行くべきか等のお話でしたが、簡単に庭を壊して駐車場にしてしまう時代の中で、色々な人々が関わり長い年月をへて現代に残っている庭には何か重いものを感じました。

さて今回の講座、久しぶりに瀬戸大橋を渡りました。開通記念の時に自転車ですべてから何十年。えらい古くなった物やなあと感じながら、正面に讃岐富士を望み会場入ると久しぶりに会う方々の元気な姿に接し、何か落ち着く思いでした。

各庭園において話を聞き、私たちの仕事とは、とにかく広いとつくづく思いました。

まとめと勉強熱心な人柄を強く感じる事ができました。

今まで、ただ一人の庭師を取り上げた展覧会がこれほど大きく開催されたことがあったのか定かではありません。実際に、展覧会に来場しないと感じられない部分は非常に多かったと思いますが、第三回田中泰阿弥展の開催に際し出版した図録の中に、新たに新潟では北方文化博物館、渡邊邸、貞観園、鎌倉では鎌倉女子大学山之内学舎、高德院、宗徧流御家元邸、瑞泉寺を収録し、まとめることができました。是非、一読願えれば田中泰阿弥の作庭観の一端を感じることができるかと思ひます。

（新潟県支部 正会員）



図面や書簡などの展示

翌日は、色々な庭園を見学させていただき、物を作るという事は出来上りの表現（完成ではない）が一番大事な事だと再確認しました。

そして表現するという事（物作り）には必ず意図があるという事、それをきちんと実現するには各作業を丁寧にしなければなりません。

それは準備（予習）と反省（復習）が大事だという、当たり前のことを続けていくことが大切であるという事を教えていただいた講座でした。

（正会員 広島県支部副支部長）



立っているのは水本支部長で座っている左から2人目が越智講師

新潟県支部

田中泰阿弥展 開催

平成25年6月8日～13日

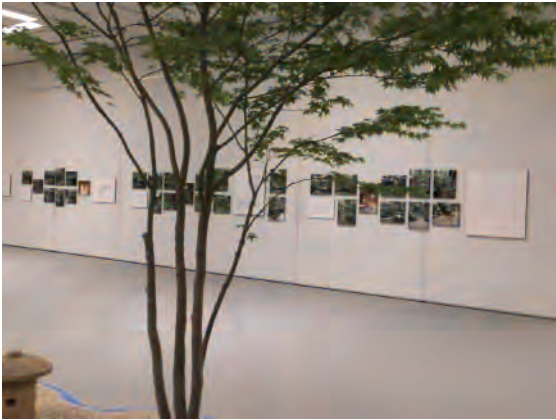
泰阿弥さんは新潟の誇り

浜田 興一

平成11年、17年に続き第三回目の田中泰阿弥展が6月8日～13日までの六日間、新潟市の新潟県民会館で開催されました。4月末に展覧会開催の会場等が決定して、わずか一ヶ月の準備期間でありましたが、三鍋光夫会員を中心に、会員一同、阿吽の呼吸で開催にこぎつける事ができたように思います。



会場の設えにも気を使いました



壁面を飾る作庭作品の数々

ただ、そこには、田中泰阿弥がいたという展覧会でありました。新潟生まれ、京都育ち、庭のみにちに入り、六十数年間、積み重ねた作庭への思いが会場に充満していました。

手がけた仕事は、新潟県支部の分会である田中泰阿弥研究会が19年間、調査してきた作品を飛石のカタチにいたるまで詳細に実測した図面と、写真パネルとともに、作庭年代の順に第一展示室に、モミジを配した清涼感のある苔庭を設け展示しました。また、第二展示室は、泰阿弥作成の図面や書簡など、直接、田中泰阿弥の口から出ている声が聞こえてくるような展示物でまとめました。なかでも、稽古事（茶道、華道など）の聞き書きや写本等を残している事は、筆